パネリスト報告　4

日本女子大学と創立者成瀬仁蔵

片桐　芳雄

かたぎり・よしお／日本女子大学名誉教授

片桐――　片桐でございます、どうぞよろしくお願いします。

私事ですが、明治生まれの私の母は実践女学校の卒業生でございまして、卒業後さらにそこで教員を務めました。今日ここにお招きいただいたことは、母が存命であれば何よりも喜んだのではないかと思います。このような機会をいただきまして、まことにありがとうございます。

これまでの先生方のお話を伺っていて、いろいろな意味でこれからお話しする日本女子大学、そして成瀬仁蔵と関係しているのだなとあらためて感じました。

たとえば下田歌子は、一九〇一年

日本女子大学創立時の賛助員に名を連ねております。

井上円了について、もちろん名前は知っておりましたが、今日伺っていて少し驚いたのは、生まれた年と死んだ年が成瀬仁蔵とまったく同じなんですね。まったく同時代を生きたそのせいでしょうか、成瀬仁蔵はクリスチャンになり、円了は仏教ですけれども、宗教思想という意味で言えば、どこか似ているなぁと感じました。円了が、最後の方では釈迦と孔子とソクラテスといった偉大なる聖人たちをあわせて、自分が尊敬する人と語っていたというお話を伺いましたが、これも成瀬と共通する部分があるんですね。成瀬は非常に熱心なクリスチャンになり、牧師も務めますけれども、晩年は、私の見るところでは――これはクリスチャンとはなんぞやという定義によって違ってくるのですが――、いわゆるクリスチャンとは言えなかった、と思っています。しかし彼は亡くなるまで、宗教的なものを非常に重視していました。しかし日本女子大学は現在、ご承知の通り、いわゆるクリスチャンスクールというかたちではありません。これは、成瀬仁蔵が自覚的に選びとった選択であります。そのあたりも重なり合うところがあるかなと思います。

そして最後の山田顕義は、まさか関係はないかなと思っていたら、彼は長州出身なんですね。成瀬仁蔵は、資料にありますように、山田顕義より十五歳若いのですが、彼も長州出身で、山田顕義は萩ということでしたが、成瀬は現在の山口市の吉敷（よしき）という所の出身で、この村からはたくさんの倒幕の志士が生まれています。成瀬仁蔵もそういう先輩たちの背中を見て育ったわけです。彼は、もう少し早く生まれていれば、明治維新に参加して直接に国家の建設に携われたのに、という思いを生涯抱きつづけた人物だと、私は思っています。その思いが、彼をクリスチャンにし、そしてその思いが、教会の組織や教団に対する疑問を抱かせる一方で、イエス・キリストの精神を生涯持って生きようとする人物にしました。山田顕義の「天然」「自然」に関するお話もありましたが、自然ということについては、成瀬も同じような議論をしております。今日の四人について、共同研究でもしてみると、おたがいの共通する部分と異なる部分とが見えて非常に面白いのではないか、と思いながら、お話を伺っておりました。

さて本題ですが、まずは現在、日本女子大学がどういうふうに創立者である成瀬仁蔵を扱っているかという点からお話をさせていただきます。

私が日本女子大学に勤めることになったのは、そう古いことではございません、二〇〇〇年からですから、比較的歳をとってから日本女子大学に勤めることになりました。若い頃から成瀬仁蔵という名前は聞いておりましたけれども、本格的に知るようになり、また日本女子大学のキャンパスに足を踏みいれるようになっ

日本女子大学と創立者成瀬仁蔵

日本女子大学名誉教授　片桐　芳雄

1．日本女子大学にとっての成瀬仁蔵

1–1　資料の収集・保存・整理、公開（展示と公刊）

中核としての成瀬記念館の役割

1–2　『成瀬仁蔵著作集』全 3 巻刊行：1974、1976、1981 年

1–3　桜楓会・成瀬仁蔵研究会（旧成瀬先生研究会）の活動：年 9 回

1–4　年間定例行事

4 月 20 日　　日本女子大学創立記念式

6 月 23 日　　成瀬仁蔵先生生誕記念日の集い

1 月 29 日　　成瀬先生告別講演記念瞑想会

3 月 4 日　　成瀬先生ご命日・逝去会員追悼会（桜楓会）

1–5　成瀬仁蔵関連研究への助成──総合研究所の役割

日本女子大学叢書等

1–6　課題・問題点

① 崇拝者と嫌悪者と無関心層

② 崇拝者の高齢化

③ 現代的視点からの創立者研究

2．私にとっての成瀬仁蔵

学部長になって

2012 年定年退職後「成瀬仁蔵とその時代研究会」発足

卒業生だけではなく学外研究者の育成・組織化

たのは、この年からでした。それであらためてというか、つくづく思ったのは、こんなに創立者のことを強調する大学は他にあるのかなと思うくらい、成瀬仁蔵、成瀬仁蔵とよく言う大学だなと感じました。

まずは成瀬仁蔵に関する資料の収集・保存・整理、公開についてですが、他の大学と同じように、成瀬記念館という施設を持っておりまして、そちらで資料の収集・保存・整理、公開をしております。記念館ではいろいろな展示もしております。一九八四年に設置されたのですが、現在もここが中核になって、いろいろな資料を収集し、整理・公開をしております。また『成瀬記念館』というタイトルの年報のようなものも、ずっと出し続けております。それから成瀬仁蔵の著作集が、一九七四年、七六年、八一年と年を追って全三巻で公刊されております。これには、著書はもちろん、成瀬が雑誌に書いたものや、開校当時から亡くなるまでの講義の学生による筆記記録――それを成瀬自身がチェックをしたもの――や、日記や書簡などが集められておりまして、これが成瀬仁蔵研究に非常に役に立ちます。特に私のようにずいぶん後から研究を始めた人間にとっては、ありがたい、基礎的な仕事です。

それから同窓組織として桜楓会というものがあるのですが、ここでは成瀬仁蔵研究会という会をほぼ毎月、年に九回ですが、開いております。いろいろな方々を呼んで、成瀬や日本女子大学に関わるさまざまな報告をしてもらって、研究交流をしております。これは戦前から続いているもので、これまでの記録も公刊しております。

そして毎年の定例行事として、日本女子大学の創立記念日である四月二十日に、新入生を対象にして、学長などが成瀬仁蔵や日本女子大学について語って聞かせる講演を――これは単なる儀式的なことではなく、授業として――、記念式とあわせて行っています。

それから六月二十三日は、成瀬仁蔵先生生誕記念日の集いというのをやっております。日本女子大学は、成瀬の考え方でもあるのですが、幼稚園から小学校、中学校、高校、大学まであわせて、学園として一貫教育のかたちをとっていますので、その学園として、毎年そのような会を開いています。卒業生などにも声をかけて、学園の現状についてお話をしております。

それから一月二十九日は、成瀬先生告別講演記念瞑想会という催しを行っています。成瀬仁蔵は一九一九（大正八）年三月四日に亡くなりますが、その亡くなる一月あまり前の一月二十九日に、自分が肝臓がんで死期が近いことを知って、学生や関係者を集めて告別のお話をしています。これを告別講演と称していまして、大学として、その日を大変大事にしております。この告別講演の

中で成瀬は、みずからについて語るとともに、これからの日本女子大学はこうあってほしいということを、看護者の付き添いのもと、ベッドの上で背中を起こして、思いを込めて一時間くらい話しました。そういうわけで、この日を瞑想会として、外部からその日にふさわしい方をお呼びして、お話をしていただいて、創立者を偲ぶ会をしています。

そして三月四日は命日ですが、この会は桜楓会が主催して、その年度に亡くなった同窓生の方々の追悼もあわせて、成瀬先生ご命日・逝去会員追悼会としてやっております。ちなみに、成瀬仁蔵の葬儀は仏式でもキリスト教式でもなく、いわば無宗教で、成瀬が好きだったフリージアの花を遺影の周りに飾って送ったのですが、当時のそのやり方を今も踏襲して続けています。これにも最初私はびっくりしたのですが、女性ならではの持続力も関係しているのでないかという気がしています。こうしたかたちで、創立者を偲ぶ年間行事を毎年行っております。

それから大学での研究としては、総合研究所という学内研究所があり、学内科研とでも言いましょうか、学内の研究グループの共同研究に対して助成をしています。これは必ずしも成瀬仁蔵や日本女子大学に関わる研究だけではございませんが、そのような研究の申請があれば積極的に助成をしています。また、学内の研究者、先生方の研究書を――これはもちろん日本女子大学に関係する研究だけではございませんが――、日本女子大学叢書というかたちで出版助成をしております。

さて、それで日本女子大学が成瀬仁蔵を中心に盛り上がっているかというと、それはそう簡単ではございません。学内に、崇拝者と嫌悪者と無関心層という三者がいるというのが、大学赴任時の私の率直な印象でした。ただし十年くらい前までは、そのように三者が対立するような状況だったかなと思いますが、文科省の指導もあって、各大学が、個性化をめざし、特色を発揮せよ、ということになると、私立大学としては、やはり建学の精神というものを強調する必要が出てきます。そういう時代のなかで、改めて、この大学がどういう事情で創立されたのか、成瀬仁蔵の考えをしっかりと思い起こして、大学教育の基礎に据える必要が求められるようになりました。そのようなわけで、客観的データがあるわけではないので、あくまで私の印象ですが、嫌悪者はいなくなってきたように思いますし、無関心な者も少なくなってきているように思います。そのように学内の人間が関心を持ってくると、学生も授業などで触れる機会も増えてきます。しかし他方、成瀬に直接に接した人間たちもいなくなってきて、いわゆる熱烈な崇拝者も減り、今後どのようにして学祖の思いを引き継いでいくのかが重要なテーマになっています。

次に私がどのような立場で成瀬に接してきたかということにつ

いてお話ししますと、創立者に関心が集まるきっかけとしては、むろん文科省や社会的な要請もありますが、大学の改革ということがあるわけです。とりあえずの改革や、一年二年でコロコロと変わる改革ではだめですので、やはりしっかりとした理念に基づいた改革をしなければならない。じゃあ、その基づくべき理念とは何か。「国際化」だとかメディアで一般的に言われるようなことをもとに改革だと言っても、どこの大学でも似たようなことを言うわけですから、それではしょうがない。そうなると創立者の声に立ち戻らざるを得ない。私も学部長になった時、そのようなことを強調しなければならなくなりまして、あらためて成瀬仁蔵について勉強するようになりました。そして、これが意外に面白いことに気がついたわけです。

たとえば、明治に作られた女子大学ですと、だいたい「賢母良妻」を育てるという話になるんですよね。ところが、それだと「いまどき「良妻賢母」ですか？」ということになるわけです。「良妻賢母」は、明治時代には新しい考え方です。江戸時代にはありませんでした。この新しい考え方を積極的に受け止めて、下田歌子も成瀬仁蔵も女性を教育しようと思った。が、今これを言うと、妻にならない人、母親にならない人はどうするんだ、じゃあみんな結婚して子供産みましょうということになるのか。そんなことを言ったら、都議会議員がバッシングを受ける、そういう時代です。

しかし、当時このように女子を教育しようとするのは、画期的なことでした。成瀬仁蔵がアメリカから帰国して日本女子大学を創設する際に、土地やお金を全面的にバックアップしたのが広岡浅子です。ちょうど今『あさが来た』という朝ドラを放映していますが、みなさんご覧になっているでしょうか。あれは日本女子大学をサポートした広岡浅子という実在の女性をモデルにしたドラマです。この広岡浅子の存在がなければ日本女子大学はおそらくできなかったかもしれない。目白にある土地五千五百坪、これは広岡浅子の実家である三井家が寄付した場所です。その意味では日本女子大学は三井家に足を向けて寝られないわけですけれど、なぜそういうことになったかというと、成瀬仁蔵が日本女子大学を作るために、一八九六年『女子教育』という本を出版しました。これを広岡浅子が読んで、ああこれだ、と非常に感動した。女に学問などいらない、生け花とお茶、お琴をやってればいい、文字の読み書きなど必要ない、と言われる中で育ったのが広岡浅子です。彼女は、やはり女性にも学問は必要だと思いながら、学問を受けられなかったわけですが、この本を読んで非常に感銘を受けた。これなら全面的に応援しましょうということになったわけです。

その『女子教育』の中で、女子教育に必要なことが三つあると、成瀬は言っています。「女子を人として育てる。婦人として育てる。国民として育てる」。人として婦人として国民として、これ

	成瀬　仁蔵	広岡　浅子
1849		京都で生れる
1851		広岡信五郎と婚約
1858	山口県吉敷で生れる	
1865		広岡信五郎と結婚
1868	明治維新	20 歳。このころから実業界入り
		24 歳ごろから潤野炭坑経営
1876	山口県教員養成所卒業	28 歳。長女亀子出産
1877	澤山保羅牧師により受洗	
1878	梅花女学校創立、教員になる	
1879	服部満寿枝と結婚	
1882	教員を辞職し伝道活動に専念	
1884	大和郡山初代牧師となる	
1886	新潟第一基督教会初代牧師となる	
1887	新潟女学校開校、校長となる	
1888		40 歳。加島銀行創立。松三郎生れる
1890	渡米。アンドーヴァー神学校入学	
1894	帰国	
1895	この頃土倉庄三郎の紹介により広岡浅子を訪ねる	
1896	『女子教育』出版	『女子教育』に感激
1900		三井家、目白の 5500 坪寄附
1901	日本女子大学校開校	日本女子大学に洋書寄贈（受入第 1 号）
1902		大同生命発足
1906		桜楓会補助団発起人。軽井沢三泉寮名誉寮監
1909		乳がん手術、成瀬の勧めにより宮川経輝牧師を紹介される
1911		宮川牧師により受洗
1912	帰一協会組織。	
1919	3.4　死去	1.14　死去

が女子教育の教育方針だと言っている。本学は、これをこのまま現在も受け継いでいます。婦人という言い方は現在は使いませんので、女性として、と言い換えています。国民として、という言い方には違和感を持つ人もいて、国際人とか市民として、と言い換えたほうがいいんじゃないかという人もいますが、私はやはり国民として、でいいと思います。ただともかく、そのまず最初に、人として、ということを言っている。そしてさらに、「女子の主要なる天職は賢母良妻たるにありとするも、その一生は必ずしも妻母たるの境遇のみに止らず。又娘嬢たるの境遇あり、寡婦たるの境遇あり、個人として働くべきの境遇あり、国民として行ふべきの境遇あり、実に然り、女子も亦人なり」とも言っています。つまり、一九〇一年当時、女子の主要な天職は賢母良妻であると当たり前に思われていた時代に、それを認めながら、しかし女性の一生は、ずっと妻であり母でありつづけるわけではない、娘であり続けるということだってある、寡婦となることだってある、個人として働くということだってある。だから、賢母良妻は主要なる女性の任務であるけれども、まずは何よりも人であり、その人であるという教育を日本女子大学はやるのだ、と言っているわけです。

これはそのまま現在に通用する考え方だと、私は思います。そして人であるためには、女性も家事、裁縫、育児といったことだけではない、高等の学問というものを学ぶ必要がある。この学問ということの意味は、先ほどの井上円了の話とかなり重なると思いますが、そういうものが女性にも、人であるかぎり必要だと成瀬は言っているわけです。こうした考え方は、やはり現在にもそのまま受け継いでいくべきものだと思っています。

学祖研究は、その時代というものをふまえつつ、同時に、そこから現在に活かす、活きる、どのようなエッセンスを受け継いでいくかということに、非常に重要な点があると思います。創立者の言うことは百年前は立派だったというだけではだめで、百年前に立派だったことが、現在にもこういうかたちで活かすことができるのだということを、学生や一般社会に説明できるようではないと、本当の意味での学祖研究にはならないのではないか、ということを強調させていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

伊藤――　片桐先生、どうもありがとうございました。

ではここでいったん休憩に入らせていただきます。先生方へのご質問やご感想がある方は、休憩時間中に質問用紙にご記入いただき、回収ボックスに入れておいていただければと思います。